

齋藤勘解由の前に使番がいる。

他に老臣の稲葉丹後（六十）、馬廻り沢瀉彦九郎、矢崎隼人、川辺右馬助が控えている。

使番「……ただ今玄関先に、元、芸州広島、福島殿の御家中で千々岩求女と申す浪人者が……」

勘解由「それで？」

使番「主家の没落後、国元を出て、江戸に移り住み、とある裏店に居を構え細々と暮らしを立てる傍ら、あれこれ伝手を求め再度の主取りを望んで参ったが、如何様にあがいてもこの泰平の世の中、所詮は思うにまかせぬ次第。志を得ぬまま無為に日々を送るうちに生活も日々窮迫の度を加え、もはやこれ以上の辛抱も相成りかねる。さらば、このまま空しく陋巷に呻吟して生き恥をさらすより、潔く腹かつさばいて相果てようと思うゆえ、何とぞ願わくば当家の玄関先を貸してはいただけまいか……」以上のように申し出ております」

・陋巷Ⅱむさくるしい町・裏町

・呻吟Ⅱうめき苦しむ

勘解由「（ホロ苦い顔付）とうとう来おったか」

丹波「で、如何取り計らいを？」

勘解由「そうじゃのオ」

一寸言葉を切って考え込む。

そして吐き捨てるように言う。

勘解由「つまらぬことが流行るものよのう」

矢崎隼人、舌打ちする。

矢崎隼人「もともと、ことの起こりは千石家の取り計らい……」

どう考えてもあれが間違っておる」

右馬助「いや矢崎、一概にそうとも」

隼人「どうして？」

右馬助「千石家を訪れた大井某は、真実腹を切るつもりであった。その点いささかのやましいところはない。されば、その心がけに打たれたればこそ、千石家も破格の取り計らいで、お納戸役にお取立てに相成ったのだ。あれはいい、

あれはあれでいいのだ……問題はその後浪人どもの  
不埒千番極まる所為だ。腹を切るつもりなど毛頭なく、た  
だただ衣食に窮するのあまり、態のいい強請ばかりで諸家  
の玄関先へ」

丹波「(穏やかに)とは言うものの玄関先で腹を切らせることも  
なるまい。まア、今日のところは他家同様、なにがしかの  
ものを与えて引き取らせるより」

彦九郎「いや、それはなりません」

丹波「あ？」

彦九郎「金をやって帰せば、またぞろ違うのが玄関先にやって  
来る」

彦九郎の声はさほど高くない。だが、この剣客の言  
葉の芯には、ズケツと冷たく人を押す強い響きがあ  
る。

右馬助「(頷き、同調する)入れ替わり立ち替わりまるで砂糖の  
山へ蟻の群がるようなことに……江戸の町々、関ヶ原以  
来の浪人でもウジョウジョ溢れておる。

餌を求めて彷徨する飢えた山犬だ」

斎藤勘解由、何も言わない。黙って腕を組んでいる。

彦九郎「(静かに)井伊家も甘いものよのう、他家とは違ってい  
ささか骨があると思えばこそ、浪人どもも昨日まではそ  
の門を避けて通った、ところがどうだあの有様は……  
赤備えの武勇などと称しながら天下泰平ともなれば、そ  
んなものは所詮遠い昔の夢物語り……このような面白お  
かしい評判が江戸中にたつても」

隼人「まして我が君は在国……その留守中に当家の威光を損な  
うが如き風評は如何なことがあろうとも」

勘解由、腕を解いてジロツと隼人を観る。

隼人、黙る。

勘解由「金を与えて退散を願うなど、そのように腑抜けたこと  
はもともと考えてはおらん……腹を切るつもりなどは毛頭  
なくせに、切腹をいたすなどと」

彦九郎「(頭を上げて、正面から勘解由を観る) 御家老」

勘解由「うむ？」

彦九郎「されば……（ゆっくり一膝前にでる）」

○ 同・書院

千々岩求女、青畳の上に正座している。

そわそわひどく落着かない。一刻以上も待たされている。不安、危惧、そして期待、ジリジリ焦燥している。

右馬助、廊下から入って来る。

右馬助「お待ちせ申した」

求女、居すまいを正す。

右馬助「（座につく）当家馬廻り役、川辺右馬助と申し上げる」

求女「芸州浪人千々岩求女にございます」

右馬助「では、ただいまより御案内申し上げます」

求女「は？」

右馬助「湯殿へ御案内つかまつる」

求女「？（何の事だか全然分らない）」

右馬助「殿はただいま御在国中であるゆえ、御家老斎藤勘解由殿

より御世継弁之助様に委細を言上せしところ、近頃誠に見

上げてたる心情の者、直ちに目通り許すとお言葉にござる」

求女「（思わずハツとする）では、お世継の弁之助様に、お目通りを！」

右馬助「左様、失礼ながらその衣服では……まずひと風呂あびてさっぱりせられい。衣服その他はただいま当家で用意を致しておる」

求女「（感激に胸が熱くなって来る）はッ、それではお言葉に甘えて……いや、何から何まで」

○ 同・元の書院

千々岩求女、黒紋付に威儀を正し正座している。よれよれの色あせた紋服の時とは、まるで人が違った程に凛々しい。

求女、押さえても押さえても明るい微笑が浮かび上って来る。

庭先で鶯の声。

求女「夢だ……全く……思いがけないと言うよりは、まるで」

「御免つかまつる」

廊下から声がして、沢瀉彦九郎おもだかが入って来る。

求女、慌てて威儀を正す。

彦九郎「(座に就く)長々とお待たせして失礼を……もう一度お

着換えを願おうか」

求女「は？」

彦九郎「お着換えでござるが」

求女「(変な顔をして、自分の着ている紋服を見廻す)」

彦九郎、無言、廊下へ向かって手を叩く。

小姓、衣服を捧げ持って入って来る。

求女、それを見た途端、ギョツとする。

水色無紋の上下と袴——明らかに死装束である。求

女、見る見る顔から血の気が引いて来る。

彦九郎「如何いかめされた」

求女「御世継ぎ弁之助様にお目通りは!？」

彦九郎「うむ？」

求女「お目通り、許される由よしであったが!？」

彦九郎「(首をひねる)左様な筈は、何かの間違いでござろう」

求女「(必死に)いや、間違いなぞ、つい先刻、馬廻り川辺右馬うめの

介すけ殿より!」

彦九郎「ほう、川辺殿が……そう言えば……うん、成程(一、

二度頷く)」

求女「(ホツとする)委細、お分りに!？」

彦九郎「いや、よく分明ぶんめい致した。家老職斎藤勘解由より、御貴

殿の申し起こしをそのまま御世継ぎ様ごんせきぎに言上せしとこ

ろ、『近頃、誠に見上げたる心底しんていの武士……なるうことな

ら予よの家臣の列に加えたい』

求女「はッ？」

彦九郎『いや、しかし、自ら腹かッさばくと申すからには並々

ならぬ余程の決心の上の事であろう。今更とめてとどま

るものでもあるまい、思いのままにしてとらせい』

求女、再びギョツと息が止まる。

彦九郎『その勇武の武士に逢い、一言、言葉なぞかけてやりた

いが、用向きで老中土井様宅まで参らねばらん……  
出来得る限り格別の丁寧な取り扱いを致し、家中一統、  
その最後の様の一部始終を見とどけ、後々までの語り草  
に致せ……』そのようなお言葉があつたように聞いてお  
る」

求女、青ざめた顔が引きつったようように硬直して  
いる。そして、膝い置いた両の拳がブルブル震えて  
いる。求女、何か言おうとする、だが唇の端が痙攣  
するだけで言葉にならない。

彦九郎「静かにその有様を見て）さ、時刻も移るゆえお召替え  
を願おう。すでに用意万端整うておる。作法通りのお切  
腹の用意がな」

求女、いきなりガバツと畳の上に両手をつく。

求女「お願いつかまつる！ お願いでござる！ 今しばらくの  
御猶予を！」

彦九郎「猶予を？」

求女「いや、逃げも隠れも致さぬ。必ず当屋敷へ立ち戻つて参  
る！ 一兩日の御猶予を！」

彦九郎「それは今更ならんな」

求女「(必死に) そんな理不尽な！」

彦九郎「理不尽。切腹はもともと御貴殿の願いに依り取り計つ  
たものと心得るが」

求女「申し訳ござらぬ、一兩日の猶予さえあれば、かならず！」

彦九郎「(ビシツと) 武士に二言はない筈、相成らぬ！」

求女、いきなりスツと立ちがり、無我夢中でズカズ  
カ部屋を出て行くこうとする。

と、襖から開き、矢崎隼人、鯉口を切つて構えてい  
る。背後にはズラリ目白押しに並んでいる井伊家の  
家臣たち。どの顔にも激しい殺意が漲り何れも刀の  
柄に手をかけている。

求女「アツ」と息を呑んで棒立ちになる。

彦九郎、ゆっくり立ち上がり、求女の傍らによる。

彦九郎「(顎をしゃくる) 裾斬りものが得意の矢崎隼人……血気  
盛ん、腕も立つ。一步でも動けば生胴が二つ、……一同

もすかさず襲いかかる」

求女、まるで紙のように白い悲痛な顔。

全身から空しく力が抜け落ちて行く。

彦九郎「軽くその肩先を叩く」ナマスのように斬りきざまれる

よりは、自ら切腹、武士らしい最期を……さ、お召し替  
えを願うか」

○ 奥書院

勘解由、キチンと正座、床の間の鐙兜に向かっている。部屋の中には誰もいない。

勘解由「御先代様に申し上げます」

生きた人に話すが如く続ける。

勘解由「当家庭先を浪人者の不浄の血で汚すことをお許し下さ

い（一礼）」

初代直政、答えない。黒い頬当に緋威の兜、どつしりと見事な緋威の大鎧をまとい、皮床几に悠然と腰をうちおろしている。

勘解由「当家御威光は申すに及ばず、延いては因縁浅からぬ徳

川家……天下士道のためかと心得ます。何とぞ、何とぞ

御照覧の程を（深く頭を下げる）」

鐙兜、答えない。ただ冷たく黙りこんでいる。

○ 長い暗転

使番の声、

『元、芸州広島、福島殿の御家中にございますな』

○ 一人の浪人が浮かび上がる

浪人「左様、姓名の儀は津雲半四郎……津雲の津は大津の津、

雲は空の雲でござるが」

使番「して、御用の趣きは？」

浪人「主家の没落致したのが元和五年、それより国元を出て、

江戸に移り住み、とある裏店に居を構え、細々暮らしを立てる傍ら、あれこれ伝手を求め再度の主取りを望んで参ったが、如何様にあがいてもこの泰平の世の中、所詮は

思うにまかせぬ次第。志を得ぬまま無為に日々を送るうちに生活も日々窮迫の度を加え、もはやこれ以上の辛抱も相成りかん。さらば……」

○御用部屋

半四郎と斎藤勘解由が居る。

勘解由「……当井伊家家老職、斎藤勘解由でござる」

半四郎「早速のお目通り、恐れ入ります。拙者、用向きの件」

勘解由「委細を聞いて承知致しておる……『いつまでも陋巷に

あり、座して死を待つよりは、潔く腹かつさばいて武

士らしい最期を遂げたい』こう言うことでござったな：

……」

半四郎「如何にも」

勘解由「近頃誠に見上げたる御心底……ただただ感服の外はご

ざらん。……貴殿は確か元福島殿の家中の者と聞いたが

千々岩求女と称する御仁を御存知か？」

半四郎「千々岩？」

勘解由「左様」

半四郎「さて？（小首をかしげる）」

勘解由「御存知ないかな、確かに元福島殿の家中と申した」

半四郎「首をひねっている）御家御隆盛の際の家臣の数は約

一万二千……一、一はとても」

勘解由「（頷いて）左様か……いや、そんなことはどうでも……

今年の春先、確か一月の終りであったな……千々岩求女

と称する浪人者が訪ねてまいった。それも、そこもとと

同じ用件でな……晴れの死に場所として、当井伊家の玄

関先を借り受けたいと言う」

と言つて、ジロツと半四郎を見る。

半四郎、怪訝な顔付、だが眉一つ動かさない」

半四郎「ほ、ほう」

勘解由「なんならお話し申そうかな、その時の経緯を」

半四郎「うけたまわろう」